

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

## 共同研究課題

### 「ダイナミズムとしての生—情動・思考・アートの方法論的接合」

第3回研究会要旨（2018年5月12日）

「スピノザの自然論・情動論・政治論における affectus の概念——哲学と人類学の間で」

箭内匡（AA 研共同研究員 文化人類学）

この発表では、今日の情動論の中心にあるところの affectus の概念について、その思想的な淵源であるスピノザの『エティカ』の原文に即して—その人類学的応用の可能性を念頭に置きつつ—検討を行った。スピノザの affectus 概念についての本発表における明瞭な主張は、次の三つである。第一に、スピノザの affectus に関する考察は、物体の相互作用（自然学）、人間の心身に生起する情動（情動論）、人間の集合体（さらには人間と事物の集合体も含みうる）において生起する集合的情動（政治論）の三つの領域を透明な形で貫いているということ。スピノザのこうした思考は、今日ますます人間と人間以外の事物を束にして捉えつつある人類学的考察にとって、大いに示唆的なものであるはずである。第二に、いわゆる情動の問題をめぐっては、スピノザの思考—もちろん affectus についてのそれを含め—が徹底的に「心身相同的」である点が想起されるべきであること。ここで「心身相同的」とは、スピノザ研究者 Chantal Jaquet が論じたように、一方で「精神で起こっていることはすべて身体で起こっており、また逆も真である」ことを意味するとともに、他方で「ある時には精神においてよりよく捉えられ、ある時には身体においてよりよく捉えられ、またある時には両方で起こっているとして捉えられる」ことをも意味する。この陰影に富んだスピノザの思考法を、具体的な人類学的事象の検討に当てはめてゆく中で、affectus の概念はおそらく（emotion の概念では捉えられなかったような）物事の新しい理解を導きうるだろう。第三に、スピノザの思考が—上でも触れた通り—個人的身体と（人間および事物の）集合的身体の両方に同時に向かっているという点を前提にするならば、一見すると個人の情動の問題のみを扱った『エティカ』という書物は、集合的身体を論じた書物として読み替えるということ。本発表ではまた、以上の三つの主張に加え、スピノザ哲学のより奥深い問題群と affectus 概念の関わりについても、原文を引きつつ可能なかぎり明瞭に論じた。他性や生成の問題に関するスピノザの考察は、存在に関する一連の用語や conatus 概念の踏み込んだ理解を必要とするかなり難解な領域だが、だからこそ—今日人類学の問題性とも通じる形で—興味深い考察の種子を含んでいると考えたからである（スピノザ哲学とベルクソン哲学の微妙な反響関係も含めて）。なお本発表においては、近年大きく発達しつつある植物学の事例を引き合いに出すことで、抽象的な次元に留まりがちな議論に、ある程度の具体性を与えることを試みた。

「生を産むことのダイナミズム——ニジェール農村地帯における情動の社会保障」

佐久間 寛（文化人類学）

佐久間報告「生を産むことのダイナミズム——ニジェール農村地帯における情動の社会保障」では、報告者が調査地で 2006 年に撮影した命名式の映像を手がかりに、本共同利用・共同研究課題のタイトルである「ダイナミズムとしての生」という問題を考察した。

命名式とは生後 7 日目に行われる名付と産割の儀礼である。あたらしく生まれた子どもは、この儀礼を受けることではじめてその生を公に認められる。その際、親族、姻族、友人、地縁と言った社会関係に沿って、膨大かつ多様な財の移動が起り、そうして集まった財の一部が子どもの生を支えるかけがえのない財産となる。この点をふまえて報告者は、命名式が「伝統的な風習」ではなく一種の「社会保障」の現場であること、UNDP の算出する人間開発指数が世界最低ランクに属するニジェールにおいては、国家が担わない社会保障を社会自体がになっていることを指摘した。

また報告者によると、命名式の間においては、通常は被写体になることを拒みがちである現地の人々が積極的に自身をビデオの前にさらしつつ儀礼の説明を行うばかりか、誰からいかなる財が贈られたかを自らビデオに記録させていた節があった。そうした人々の振る舞いに、命名の祝福をとおい異郷の「白人」にまで知らせようとする人々の衝動(撼動?) があらわれていたと考える報告者は、実際この映像を見る者はどこに住む誰であれ命名の「証人」として儀礼のなかに組み込まれてしまうこと、時や場所や観察者／被観察者の境界を越えて社会的な生を生み出すこうした集合的实践にこそ「ダイナミズムとしての生」の具体的なあらわれがみとめられることを主張した。